

第2回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「ノラ爺のきらきらぼし」

岩手県立盛岡第二高等学校三年 橘加奈子



賢治のまちから
高校生★童話大賞



賢治のまちから
高校生★童話大賞

『ノラ爺のきらきらぼし』

岩手県立盛岡第二高等学校 三年 橘 加奈子

星は、どうしていつも光っているの？

地上の光に負けても。雲に隠れても。

どうして、ぼくたちを見下ろしてるの？

星からは、何が見えるの？

一体、何を見ているの？

君は、誰なの？

ぼくは『カノン』。この名前は自分でつけた。人間が作った音楽の中に、同じ名前の曲がある。なんといっても、ぼくは音楽が好きだ。人間のしたことで褒められることを言うなら、唯一それは歌を作ったことだ。歌はいい。心が和む。

ああほら、今も『ピアノ』の音が聞こえてきた。あれはたぶん、『タケダ』さん



賢治のまちから
高校生★童話大賞

家の『ミキ』ちゃんの練習。髪の毛くるくるした可愛い子だ。今はアラベスクを弾いてる。明日は先生の来る日のはずだから、また明日ここに聞きに来よう。

きちんとした曲もいいが、小さな子の適当な『ピアノ』もいいもんだ。人間たちはうるさがるが、あの芸術がわからないとは何てやつらだ。あの音にリズムを感じないのなんて、人間たちと『トム』だけだ。きっとそうだ。

『トム』ってのはぼくの仲間だ。トムは飼われ猫。ちなみにぼくも猫だ。ただし、ノラってやつ。ノラはいい。好きなときに好きなことができる。最高だよ。人間に自由はない。『シゴト』とか『ペンキョウ』ってやつにいそしんで、疲れた顔ばかり。飼われ猫は、そんな人間に束縛される。ぼくは絶対ノラがいい。だがトムはノラってやつを理解しない。「ノラにはふかふかのベッドも上等のキャットフードもない。名前さえないじゃないか。みーんな、『ノラ』だ。」

名前をつけるまでのぼくは確かに『ノラ』って呼ばれてた。ぼくだけじゃない、トム以外の仲間猫はみんな『ノラ』。だから、めん



賢治のまちから
高校生★童話大賞

どくさくっていけない。

どうして昔の猫先輩たちは、名前をつける習慣を作らなかったのか、不思議で仕方がない。だって、誰かが「ねえノラ」って呼ぶと、トム以外の全員が振り向くんだ。そして、それを見てトムがげらげら笑う。ぼくたちはいつも苦い顔でトムを見る。いつか仕返ししてやろうと思ってたけど、ぼくが全員に名前をつけてあげた時のトムの顔だったらなかった。猫のくせに、路地に追い詰められたネズミみたいな顔。人間が使う『カメラ』ってやつで、『シャシン』ってのに収めたかったと、あとで仲間と笑い転げた。

さっきから『シゴト』だの『シャシン』だのと、ぼくはいろいろ人間の言葉を知ってる。でもこれはぼくが調べたんじゃない。仲間の『ジテン』ってやつがやたら詳しいんだ。

「これは『イチエンダマ』と言って、人間が買い物するのに使う『オカネ』の一つです。」

「それでキャットフードいくつ買える？」
「わかりません。」

肝心なことを知らない。それにしてもあいつはどうやってそんなことを調べて来るんだ。聞けばいつも『ジテン』で。」って言う。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

だからぼくはあいつに

『ジテン』で名前をつけた。

「カノン。ここにいたのか。探したぞ。」

上から声が降ってきた。公園の高い木の上にいたぼくよりさらに高いところから。

「ハシゴ、どうやってここに登ったのさ。」

「爪で。オイラの自慢の爪だからなっ。」

うれしそうに『ハシゴ』が言う。ハシゴはいつも爪を自慢する。

無理もない。

だって誰から見ても立派な爪だから。そしてハシゴはその爪で誰よりも高いところに登る。だからぼくは人間が高いところに登る道具の名前をそのまま彼に命名した。『ハシゴ』って。

「カノン。ノラ爺がお前を呼んでたぞ。今日の夜にいつものところについてさ。」

「知ってる。毎日誰かが言いに来るんだ。昨日はジテンが来たよ。『ノラお爺さんが明日の夜、いつもの場所に来なさい』と言っていましたよ。」って。毎日違う仲間が来るんだ。一体なんだろうね。」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「さあ。ほんと、何だろうね。」

二人で首をかしげて、そして笑った。

ハシゴはぼくの一番の友達なんだ。

ノラ爺は、ちよつと変わった猫だ。

ぼくたちの仲間の中でも一番の古株。一体今いくつなんだ？『センソウ』ってやつの中で産まれたって聞いたけど、それってずいぶん昔。『センソウ』ってやつ話を聞くと、ぼくはそれだけで人間が嫌いになるんだ。

たくさんの人が死んだんだ。

たくさんの猫が死んだんだ。

仲間に名前をつけようとしたとき、ノラ爺だけはそんなものいらんって言った。

『センソウ』ではわしのノラ仲間がたくさん死んでいった。わたしはみんなに『ノラ』と呼ばれとった。わたしは『ノラ』が好きじゃ。すまんが、わたしは「ノラ」のまま死んでいきたいんじゃない。そして死んで仲間に会えたら、また『ノラ』と呼んで欲しいんじゃないよ。」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

よくわかんなかった。名前があつたほうが絶対いいと思ったのに。それに、『死んで仲間に出会えたら』って、死んだら何にもできないじゃないか。

「いつかわかることじゃ。お前さんは『カノン』じゃな？いい名じゃ。よろしくなあ、カノンや。」

やっぱりわかんなかった。

「で、カノンはここで何してるんだ？」

ハシゴの問いに、ぼくは笑顔で答えた。

「ピアノを聞いている。今『タケダ』さん家の『ミキ』ちゃんが練習してたけど、『フジサワ』さん家の『アキホ』ちゃんも始めたみたい。初めて聞く曲だけど、きれいだなあ。なんて曲だろう。」

「すげえなあ、カノン。人間の名前をよく覚えてる。オイラはトムの飼い主の名前しか知らねえ。」

ぼくは目を閉じて『ピアノ』に耳をかたむけた。髪の毛の短い女の子が、一生懸命ピアノを弾いてる姿が目に見えかぶ。すると、ピアノの演奏と一緒に、歌声が聞こえてきた。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

きらきらひかる

まばたきしては

きらきらひかる

おそらのほしよ

みんなをみてる

おそらのほしよ

可愛い声。一生懸命歌ってるのがわかる。

「へえ、優しい歌だな。オイラ、この歌好きだよ。」

ぼくは不思議な感じがした。『ホシ』ってやつは知ってる。ジテ
ンに聞いた。晴れた夜の闇に小さく光る粒のことだ。すごく遠く
にあつて、どんなに高いところに登っても手が届かない。どんな
形かもわからない。

「ねえ、ハシゴ。『ホシ』って誰かの目玉なのかな。今の歌、ま
ばたきしてはみんなをみてる。だったよね？」

ハシゴがあきれたように言った。

「知らねえよ。それよりオイラは、一度聞いた歌は絶対忘れない
カノンがすげえと思う。」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

ハシゴの褒め言葉も耳には入らず、ぼくはとにかく『ホシ』のことが知りたくなった。

「カノン。何してるの？こんなところで。」

「ノクターン。」

ハシゴと別れて道路を歩いてたぼくに声をかけたのは『ノクターン』だった。

ぼくと一緒に歌が大好きな女の子ノラ。とても気が合うから、彼女の名前も歌の名前からつけた。

『『ホシ』のことを知りたくて。『アキホ』ちゃんが歌ってた『ホシ』の歌が気になって。」

『『アキホ』ちゃんの『ホシ』の歌？それって『きらきらぼし』のこと？』

ぼくは勢いよく振り返った。

「ノクターン、あの歌知ってるの？」

とつても驚いたみたいで、ノクターンはおどおどして答えた。

「え、あ、うん。前にノラお爺ちゃんから教えてもらったから。」

「ノラ爺から？」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「すごくきれいな歌よね。お爺ちゃんも、歌聞いて泣いてたもの。」
ノクターンは、その時のことを詳しく話してくれた。

お爺ちゃんと散歩してたときよ。急にお爺ちゃんが立ち止まったの。耳ピンと立てて、驚いた顔してた。私もびっくりしたのよ。何が起ったのかわからなかったし、声かけても何にも答えないんだもの。そしたらその内ふらふらって歩き出して、『アキホ』ちゃんの家のように進んでいったわ。慌てて追いかけたら、『ピアノ』が聞こえたのよ。それが『きらきらぼし』。

「……懐かしいのお……。」
お爺ちゃん泣いてた。笑ってるのに悲しそうで、私、何て声かけていいかわからなかった。だからじっとお爺ちゃんの顔を見たの。そしたら、気付いたお爺ちゃんが、こっち見て笑って言ったの。

「……ノクターン……優しい目じゃ。きつときれいなお星さんになるんじゃないかな……。」

『『ホシ』になるって?』

ノクターンはこっくり頷いた。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「その後は「アキホ」ちゃんの歌と一緒に聞いてたわ。お爺ちゃんも歌ってた。」

時々空見上げたり、うつむいたりして……。」

ぼくは腕組みした。

「ノラ爺は『ホシ』のこと何か知ってるのかなあ。今夜聞いてみようかな。」

「今日お爺ちゃんに会うの？そうね、それがいいと思うわ。」

ノクターンは笑った。

「それじゃ、またねカノン。」

ノクターンは、ひらっと扉に飛び乗ると、軽い身のこなしでどこかへいなくなった。

日もとつぷり暮れて、空には『ホシ』が少しずつ姿を現してきていた。

ぼくは、ノラ爺が寢床にしている橋の下を訪ねた。ノラ爺は、笑顔で出迎えてくれた。

「カノン。よく来たのお。」

「ノラ爺。何かあった？」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

ノラ爺は何かいつもと違って見えた。なんだか元気がない。

「ほっほ。何かあったかじゃと？何かあるのはこれからじゃよ。」
笑うノラ爺は穏やかで、でも頼りない。

「長いこと待たせたの、カノン。じゃが、今日でなけりゃいかんかった。今日は特別な日なんじゃよ。星の祭典の日じゃ。」

ぼくは思い立って聞いた。

「そうだ！ノラ爺。ぼく、『ホシ』のこと聞きたいんだ。教えてよ。
あの空で光ってる、『ホシ』は一体何？誰なの？」

ノラ爺は突然大声で笑い出した。ぼくはぎよっとして、尻尾を一気に緊張させた。

「星の正体か。不思議な偶然じゃな。どうせ話すつもりじゃった。
ついておいで。」

ノラ爺に言われるがまま、ぼくは橋のてっぺんへと移動した。

「ここは星を見るのにや最高の場所じゃ。」

ノラ爺に並んでぼくは狭い橋のてっぺんに座った。きらきら『ホシ』が光っている。

「何から話そうかの……ふむ。カノンよ。お前さんはわしが今い



賢治のまちから
高校生★童話大賞

くつか知つとるかの。」

「えっ」

急な話題にぼくはすつとんきような声を上げた。

「……知らない。かなりの長生きだとは思ってるけど……。」

「そうじゃろうな。わしの年齢なんぞ知つとる猫はもう生きてはおらん。わし

は今日で六十じゃから。」

開いた口が塞がらなかった。有り得ない。どうかしてる。だつてぼくたちは猫なんだ。でもノラ爺は嘘を言ってる様ではなかった。

「驚いたじゃろ。誰にも話したことはなかったからのう。理由があるんじゃないよ。

でなければ、こんなことは有り得ん。」

ぼくはなにも言うことができなかつた。

「わしの仲間たちと……星の力なんじゃ……。」

ノラ爺は、寂しそうに昔話を始めた。

わしは、『センソウ』の中で生まれた。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

親はわしが生まれてすぐ死んでいった。わしも何度も危険な目に遭った。

じゃがわしには仲間がおった。わしはそれだけで充分じゃったよ。

……晴れた日じゃった。

わしは目の前の光景に愕然とした。ちよつと水を飲みに行っただけじゃった。

そのわずかの間に、人間を殺すための道具は、わしの仲間の命を奪ったんじゃ。

わしは一匹一匹のところを駆け寄った。一匹一匹に『ノラ』と声をかけたよ。

人間というもんは、頭が良いばかりに、何かに集中すると恐ろしいものを作っていることに気付かん。猫がマタタビを見ると飛びつかずにはいられんのと一緒ことじゃ。とにかく、人間の作った『ヘイキ』は、爆風だけで、わしの仲間を全滅させてしもうたんじゃ。

「……「ノラ」……。」

わしは振り向いた。リーダーじゃった。生きとったんじゃ。駆け寄って、手を握った。血まみれじゃった。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「良かった」生きてたんだね！」

しかし、リーダーは首を振った。

「いや……かろうじて生きてるが……じきに……」

わしは泣いた。泣き叫んだ。

「いやだ！そんなの嫌だ！ぼくたちは仲間でしょう？『ノラ仲間』
なんででしょう？」

リーダーは笑った。わしは叫び続けた。

「置いていかないでよ！どうして？どうしてぼくだけ残るの？」

「……見ろ……『ノラ』……星が……」

わしは見上げた。そして、息をのんだ。

急流のように、ものすごい遠さの線が、いくつも走ったよ。

いつもは静かな夜空が、光に満ちておった。……星が流れとった
んじゃ。それは神秘的な光景じゃった。まるで特別な儀式のよう
じゃった。呆然とするわしにリーダーは言った。

「……流星は、望みを叶える……ノラ、俺は生きてかった……だ
から……ノラにそれを託す……」

わしは黙った。リーダーの言葉を待った。

「まだ幼いお前を……残すことは何より辛いが……お前には、未



賢治のまちから
高校生★童話大賞

来がある……生きてくれ。俺たちの生きるはずだった分まで……」
涙は、リーダーにこぼれた。リーダーの目は、わしをしっかりと
見とった。

「……星は、決して届かない遠くにある……俺たちも、あの星に
なるんだ……」

雲の深い暗い夜でも、その先に必ず、俺たちはいる。……ずっと
見守っている

……そしていつか、流星になって、迎えにくる……大切な仲間、「ノ
ラ』……」

わしはもう言葉が出なかった。出せんかった。そしてリーダー
は、歌いだした……。

きらきらひかる

まばたきしては

きらきらひかる

おそらのほしよ

みんなをみてる

おそらのほしよ



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「それきり、リーダーはもう起きんかった。」

ふふ、とノラ爺は笑った。

「わしは泣き疲れていつしか眠っとったよ。目覚めたときには、もう朝じゃった。そして、わしは生きた。こうして六十になるまで。」

「ノラ爺…。」

何て言っているのかわからなかったけど、何か言わなくちゃと思っ
て、ぼくは言葉を探した。次の瞬間。

「じゃが、そんなわしにも、迎えが来る日が来たんじゃよ。」

「え？」

辺りがまぶしく輝いた。空いっぱい光の線が走った。ぼくは
急な光に目がくらんだ。

「ノラ爺？どこ？何も見えないよ！」

優しい声が聞こえた。

「今日はわしが星になる日じゃ…カノン。ありがとうなあ。お
前さんは優しい子じゃ。わしはお前さんが、大好きじゃったよ。」

「ノラ爺っ！」

ぼくは叫んだ。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「カノン。お前さんの気持ち、うれしかったんじゃない。しかし、わしは『ノラ』でいたかったんじゃないよ。今日この日まで、『ノラ』のまま、仲間のところに行きたかった。お礼を言いたくて、今日お前さんと呼んだ。わしも星になるんじゃない。

空の上で、ずっと見とる。忘れんよ。お前さんのことを……」

閃光が視界を奪った。そしてそれを最期に、ぼくはノラ爺を見ることはなかった……。

「おい！カノン！！」

目が覚めたとき、目の前にはハシゴがいた。

「良かった、心配したんだぞ。いつもの寢床にお前がないから。

ノラ爺のところに迫まったんだな。でもノラ爺がないぞ。どこ行ったんだ？」

ハシゴの一方的な話を聞きながら、ぼくはぼんやり昨日のことを考えていた。

流れる星。昔のノラ爺の仲間。『センソウ』。そして、星になったノラ爺。

「おい、カノン？」



賢治のまちから
高校生★書話大賞

「……ノラ爺は、ぼくたちを見てるんだよ。」

「ええ？カノン、何言ってるんだよ？」

「……なんでもない。」

その日の夜、ぼくはハシゴと一緒に昨日の橋の上に行った。とても晴れた空で、星はどこまでもどこまでも遠く美しく光っていた。ぼくは歌った。

きらきらひかる

まばたきしては

きらきらひかる

おそらのほしよ

みんなをみてる

おそらのほしよ

「やっぱいい歌だなっ！なんか、いつも守ってもらってるみたいだ。」

無邪気に言ったハシゴの言葉が、ぼくの心の中に沁みこんでいっ



賢治のまちから
高校生★童話大賞

た。

ノラ爺。

そこにいるの？

いつもそこから見ててくれるんだよね。

ノラ爺の仲間と一緒に。

星は、どうしていつも光っているの？

地上の光に負けても。雲に隠れても。

どうして、ぼくたちを見下ろしてるの？

ねえ、ぼくが見える？

ぼくを見てる？

ぼくは生きてる。この場所で。

ぼくはカノン。

生きるよ。せいっぱい。

ぼくも、いつか星になるんだ。

みんな、星になるんだ。

約束だよ、見ていてね。それまでは。



いつか、
迎えに来るときまでは—。